

諸卿大夫等の難波に下る時の歌

——「散り過ぎにけり」を手がかりに——

小田 芳 寿

一 はじめに

二 A群

三 B群

四 おわりに

小稿では、諸卿大夫等の難波に下る時の歌（9・一七四七〜一七四八―以下A群、一七四九〜一七五〇―以下B群）の分析を、A、B両群の長歌にそれぞれ見られる龍田山の桜の様相を「散り過ぎにけり」と歌うありようから行う。「散り過ぎにけり」を手がかりに歌表現を追えば、A、B両歌群の性質をいかに把握するかというところに波及するであろう。A群では、「散り過ぎにけり」を契機として、桜が散ってしまうことへの懸念を歌った歌であり、B群では、「散り過ぎにけり」を契機として、桜がこれから変化することを目指すとともに、A群で抱いた懸念が杞憂に終わることを歌った歌であることを論じる。A、B群では、龍田山越えを介在させることで、桜の様相を捉える視座が異なっていたといえよう。

一 はじめに

【A群】

春三月、諸卿大夫等の、難波に下る時の歌二首

并せて短歌

白雲の 龍田の山の 瀧の上の 小桜の嶺に 咲きををる
桜の花は 山高み 風し止まねば 春雨の 継ぎてし 降れば
ほつ枝は 散り過ぎに けり 下枝に 残れる花は し
ましくは 散りなまがひそ 草枕 旅行く君が 帰り来る
まで（9・一七四七）

反歌

我が行きは 七日は過ぎじ 龍田彦 ゆめこの花を 風に
な散らし（9・一七四八）

【B群】

白雲の 龍田の山を 夕暮に うち越え行けば 瀧の上の
桜の花は 咲きたるは 散り過ぎに けり 含めるは 咲き
継ぎぬべし ちちごちの 花の盛りに 雖不見左右「¹」君が
み行きは 今にしあるべし（9・一七四九）

反歌

暇あらば なづさひ 渡り 向つ峰の 桜の花も 折らまし
ものを（9・一七五〇）

右の歌群は、一七六〇番歌の左注に「右の件の歌は高橋

連虫麻呂が歌集の中に「出づ」とある範囲内に収まるものと
考えられる。そのため、歌作者にはその高橋連虫麻呂が比
定されている。高橋虫麻呂は藤原宇合が常陸守の時、下級
官僚として仕え、その庇護の下にあつたとされている。こ
のことから当該歌群の考察は、藤原宇合との関わりと、歌
われる龍田山の桜の様相について議論が交わされてきた。
たとえば、坂本信幸氏「花之盛尔雖不見左右―万葉集卷
九・一七四九番の訓詁」（『ことばとことのは』第十集、一
九九三年十二月）は、

主人に尽くす心のほどを見せて賀の歌群を歌い納めた
のである。花の盛りに見ざれども、花の盛りのごとき
めでたさに作歌しえたのは、歌人虫麻呂の技量による。
と述べ、当該歌群の桜の描写の仕方に虫麻呂の技量の高さ
を指摘する。近時でも、瀧口翠氏「高橋虫麻呂の龍田の
歌」（『上代文学』第一一二号、二〇一四年四月）が、「表
現される『桜』をめぐる情は、虫麻呂の独自性を描き出
す」と言及する。

こうした見方は間違いなからうし、首肯できるけれども、
当該A、B群の長歌にそれぞれ見られる龍田山の桜の様相
を、両群共に「散り過ぎにけり」と把握している点につい
ては、多少考える余地があるように思われる。「散り過ぎ
にけり」という表現は、集中他に例を見ず、当該A、B群

の長歌二首ずつに見られる。当該A、B群長歌二首は、同じ歌い出しで始まり、最初の文が「散り過ぎにけり」で終わる。「散り過ぎにけり」を手がかりに歌表現を考えることは、A、B群の長反歌それぞれの理解の仕方へと波及するであろう。そしてその射程は、歌群の性質をいかに把握するかというところにまで及ぶ。小稿は、この点を手がかりに当該歌群の性質について考察を加えるものである。

二 A群

A、B群は、題詞に「春三月、諸卿大夫等の、難波に下る時の歌二首」とあり、大和から難波へ向かう折の歌であることがわかる。まずはA群長歌の歌表現の質を考える。

A群長歌の「白雲の龍田の山の瀧の上の小枝の嶺に咲きををる桜の花は」という歌い起しは、白雲が立つ龍田山を概括的に捉え、そこから小枝の嶺に咲き誇っている桜の花へと収斂していく表現である。

そうした歌い起しによって描写される桜の花は、「ほつ枝は散り過ぎにけり」下枝に残れる花はしましくは散りなまがひそ」と歌われる。例えば、「ほつ枝」や「下枝」の状況を歌う歌には、

いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道の 香細
し 花橘は ほつ枝は 鳥居枯し 下枝は 人取り枯し 三

つ栗の中つ枝の ほつもり 赤ら嬢子を 誘ささば 宜しな（『古事記』 応神天皇条・歌謡四三）

いざ吾君 野に蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道に 香ぐはし 花橘 下枝らは 人皆取り ほつ枝は 鳥居枯らし 三栗の中枝の ふほごもり 明れる嬢子 いざ栄映えな（『日本書紀』 応神天皇条・歌謡三五）

がある。二例共に「ほつ枝」は鳥が飛ぶ上空、いわば木の上方を意味し、「下枝」は人の手が届く範囲である木の下方をさすと考えられる。そして眼前の「花橘」の「ほつ枝」と「下枝」の様相を歌うものである。当該歌の場合、長歌冒頭から概念的に捉えられていた描写は「風し止まねば」や「継ぎてし降れば」という確定条件句を経て、「ほつ枝は 散り過ぎにけり」を契機として、木の上方の桜の花が散り過ぎたことに気付いた瞬間が歌われているのであり、眼前の龍田山の桜に対して発せられている嘆きと解してよい。

その眼前の桜に対する嘆きは「下枝に残れる花はしましくは散りなまがひそ」へと繋がる。「散りなまがひそ」には、

秋山に 落つるもみち葉 しましくは 散りなまがひそ
妹があたり見む（2・一三七 一に云ふ）

がある。落ちている「もみち葉」を眼前に捉え、「もみち

葉」が散らずあることを強く求める歌いぶりといえよう。当該表現の場合は、眼前に捉えている「残れる花」に対して、現状の維持を強く求める歌いぶりであり、木の下方の桜に静止を要求する描写と解釈できる。

龍田山を概括的に捉え、そこから桜の花へと近接した結果、風や春雨によって、「ほつ枝は 散り過ぎにけり」と木の上の方の桜の花が散り過ぎたことに気付くのである。そうした桜を捉える視座は固定されている。そして、固定された視座を通して「散り過ぎにけり」という気付きを起点に、「下枝に残れる花」に対する現状の維持が強く要求されるのである。

そうした現状の維持が要求される因由を担っているのが、長歌結解部「草枕 旅行く君が 帰り来るまで」である。この結解部について、契沖（『代匠記 初稿本』）は、

これはとゞまれる人のよみたるやうにきこゆれと、反歌に、わかゆきはなぬかは過しといへるをおもふに、われも難波へ下る身ながら、大夫のしりへにしたかへる人の、貴人のために、草枕たひゆく君か帰りくるまでといひ、みつからもゆくゆへに、我ゆきはなぬかは過しともいへるなり。

と、留まり見送る側の表現である可能性を示唆するものの、諸卿大夫とともに同行する者の立場で歌う表現であること

を述べる。しかし、反歌の「我が行きは七日は過ぎじ」を根拠に「旅行く君が 帰り来るまで」という旅を「みつからもゆく」旅と結びつけることはできない。ここは「旅行く君が 帰り来るまで」について「とゞまれる人のよみたるやうにきこゆれと」とした前掲の契沖『代匠記 初稿本』の見解をあらためて想起する必要があるのではないかなお、契沖が先の『代匠記 初稿本』の考えを捨てて『代匠記 精撰本』で「此歌ハ京ニ留マル人ノヨメル故ナリ」としたところは重要である。この理解の焦点となる「旅行く君」は集中に九例ある。

草枕 旅行く君と 知らませば 岸の黄生に にほはさましを（1・六九）

天地の 神も助けよ 草枕 旅行く君が 家に至るまで（4・五四九）

草枕 旅行く君を うるはしみ たぐひてそ来し 志賀の 浜辺を（4・五六六）

白雲の 龍田の山の 露霜に 色付く時に うち越えて 旅行く君は 五百重山 い行きさくみ 敵守る 筑紫に至り 山のそき 野のそき見よと 伴の部を 班ち遣はし 山彦の 応へむ極み たにぐくの さ渡る 極み 国状を見したまひて 冬ごもり 春さり行かば 飛ぶ鳥の 早く来まされ 龍田道の 岡辺の道に 丹つつじの にほはむ

時の桜花咲きなむ時にやまたづの迎へ参み出む
君が来まさば(6・九七一)

草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔し
も(12・三二八四)

草枕旅行く君を荒津まで送りそ来ぬる飽き足らね
こそ(12・三二一六)

ひさかたの都を置きて草枕旅行く君をいつとか待
たむ(13・三二五二)

草枕旅行く君を幸くあれと斎瓮据ゑつ我が床の辺
に(17・三九二七)

櫛も見じ屋内も掃かじ草枕旅行く君を斎ふと思ひ
て作者未だ詳らかならず(19・四二六三)

いづれも「旅行く君」は、その「君」を見送る側の表現である。当該歌においても、留まり見送る立場の表現とするよりあるまい。

すると見送る立場の者が、龍田山の桜の花へと視線を近接させ、桜花の状況を、風や春雨によって「散り過ぎにけり」と気付き、「下枝に残れる花」に対する現状の維持を「旅行く君」が帰って来るまで強く求めているということになる。「下枝に残れる花」に対する現状の維持が強く求められていたのは、「旅行く君」の帰還を彩るためと理解できよう。

A群長歌は、固定された視座のもと「散り過ぎにけり」という気付きを契機として「残れる花」に対する現状の維持を強く要求する歌といえよう。こうした「散り過ぎにけり」の重要性を一層、明確にするために、さらに反歌を考える。

反歌の「我が行きは七日は過ぎじ」は長歌結解部「旅行く君が帰り来るまで」との対応を見ることができ、反歌「我が行き」の例は集中、三例ある。

焼津辺に我が行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし児らはも(3・二八四)

我が行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にもありこそ(3・三三五)

我が行きの息づくしかば足柄の峰這ほ雲を見とと偲はね(20・四四二一)

用例を見る限り、「我が行き」は旅にある者の表現である。反歌における歌の中の「我」は旅にある者であり、それは、長歌との対応を考えれば見送られた者ということになる。第二句以下の「七日は過ぎじ 龍田彦 ゆめこの花を風にな散らし」の表現は、長歌「ほつ枝は散り過ぎにけり 下枝に残れる花はしましくは散りなまがひそ」と対応していることはいまでもあるまい。すると、反歌は見送られた者が、固定された視野に収めている桜を「龍田

彦^③」に対して散らすなど、現状の桜の静止を要求する歌と
いうことになる。長歌との対応を考えれば、長歌「散り過
ぎにけり」の表現の射程は反歌にまで届いているともいえ
よう。

さて、こうした長反歌の対応について、『総釈 卷九』
(川田順氏担当)は、

この長歌と反歌とは作者の人格が違ふのではあるまい
か。反歌は旅行く人、長歌はその妻が詠んだものと解
することができる。

と指摘する。長歌を「妻が詠んだもの」とするには慎重を
期する必要がある。たとえば、前掲「旅行く君」を歌う歌
の「白雲の龍田の山の露霜に色付く時にうち越えて
旅行く君は五百重山い行きさくみ敵守る筑紫に至り
く」(6・九七)では、高橋虫麻呂が西海道節度使の藤
原宇合に対して歌っていることがわかる。^④この歌の理解を
踏まえれば、やはり長歌を「妻が詠んだもの」とするには
疑問が残る。むしろ、『総釈 卷九』(川田順氏担当)の指
摘の重みは「この長歌と反歌とは作者の人格が違ふ」と対
応関係を見出した点にある。なお、『全集』も「長歌はこ
こから引き返す見送りの者が詠んだ形であるが、この語
(小田注・「我が行き」)は、反歌が旅行く者の作であるこ
とを示す」と説いている。

しかし、前掲瀧口論文は、

見送る者の立場に模して詠んだ歌であるなら、見送る
者が龍田まできていることになる。しかし、境の地龍
田の山中まで見送ることは有り得るだろうか。

と疑義を呈する。瀧口論文の疑問は、誦詠の実態を作品の
読みへといかした結果、起こったことであろう。誦詠の実
態を作品世界の把握の手段として用いることには限界があ
ると思われる。歌表現に即して考えれば、龍田の境での別
れが歌われるということが重要なのであろう。

当該A群の長反歌は、見送る者と見送られた者の立場で
歌われていた。そうした長反歌は、固定された視座を通し
て龍田山の桜の様相を捉え、「散り過ぎにけり」を契機と
して、一貫して桜の現状の維持を要求する歌であった。桜
への静止を要求する歌いぶりは、大和側から見た桜の状態
に対してこれから散ってしまうことへの懸念ともいえよう。
このA群の理解を念頭に置き、次にB群の表現考察に移る。

三 B群

B群長歌は「白雲の龍田の山」に加え、「瀧の上」の
「桜の花」の景の描写へと続く。このことから、B群長
歌ではA群長歌の桜の様相を表現の素地としていることが
わかる。とすれば、当該部の「白雲の龍田の山を夕暮に

うち越え行けば」は、A群反歌の続きとして見送られた者が「龍田山を夕暮にうち越え行けば」と歌っていることになる。A群長反歌では、見送る者と見送られる者の視座が固定されているが、当該部では、見送られた者の視座は移動していることになる。

さて、「越え行く」が集中から十一例見出せる中で、「越え行けば」という確定条件の例は四例ある。それらの用例を見れば、

① 真木の葉の しなふ背の山しのはずて 我が越え行けば
木の葉知りけむ (3・二九一)

② 塩津山 うち越え行けば 我が乗れる 馬そつまづく 家
恋ふらしも (3・三六五)

③ 妹に恋ひ 我が越え行けば 背の山の 妹に恋ひずて あ
るがともしさ (7・一二〇八)

④ 大君の 命恐み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積む
泉の川の 早き瀬を 棹さし渡り ちはやぶる 宇治の渡
りの 激つ瀬を 見つつ渡りて 近江道の 逢坂山に 手向
して 我が越え行けば 楽浪の 志賀の唐崎 幸くあらば
またかへり見む 道の隈 八十隈ごとに 嘆きつつ 我が
過ぎ行けば いや遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え
来ぬ 剣大刀 鞘ゆ抜き出でて 伊香山 いかにか我がせ
む 行くへ知らずて (13・三二四〇)

のように、「背の山」を賞美することなく越えたことを歌う①の歌や、「塩津山」を越えて行くことで家人を思う気持ちが高まつていくことを「馬そつまづく」と歌う②の歌そして、共にいない「妹」を思い、山越えをしたものの「背の山」は妹(妹山)を恋しがらずにいるので、それを羨む③の歌、さらには、「逢坂山」を越えたことで、「志賀の唐崎」を想う④の歌のように、これら四例は「山」を境界とし、その「山」を越えて来たことによって抱く思いを歌う歌と理解してよからう。

さらに、集中で「越ゆ+確定条件」の例として「越え見れば」や「越え来れば」を見出せる。

四極山 うち越え見れば 笠縫の 島漕ぎ隠る 棚なし小
舟 (3・二七二)

大坂を 我が越え来れば 二上にもみち葉流る しぐれ
降りつつ (10・二一八五)

妹がりと 馬に鞍置きて 生駒山 うち越え来れば 黄葉
散りつつ (10・二二〇一)

之乎路から 直越え来れば 羽咋の海 朝なぎしたり 舟
梶もがも (17・四〇二五)

四例共に、前に掲げた「越え行けば」という確定条件の例と同じく山道を越えた後の景を歌う歌といえよう。境界を超え行く(来る)ことが歌世界に新しい空間を作りだす

という点において、これらと当該歌は共通している。当該歌の場合、「龍田山」を越える前と越えた後では、桜を見る視座が異なり、それにもなつて、抱く思いも異なると理解してよいだろう。当該部は、龍田山の和側から難波側へと到り移動していることを歌う表現であり、A群とは異なる視座が確保されていると考えられよう。A群との視座の異なりを明確化するためには、当該歌の桜の描写にも見られる「散り過ぎにけり」のありようにこそ重点を置くべきであろう。

当該歌では、「龍田山を夕暮にうち越え行けば」という確定条件句を経て、「散り過ぎにけり」を契機として、瀧つ瀬の桜の花が散り過ぎたことに気付いた瞬間が歌われている。難波側から見た龍田山の桜に対して発せられている嘆きと解してよい。ただし当該歌の場合「散り過ぎにけり」という気付きから起こった嘆きの情は「含めるは咲き継ぎぬべし」へと繋がる。難波側から見た龍田山の「瀧の上の桜の花」は散り過ぎたものもあれば、まだ、つぼみの状態のものもあつたということになろう。当該部では「散り過ぎにけり」という気付きを契機として、つぼみの状態である桜に対して、これから咲き継ぐことへの期待感が歌われるのである。

すると、B群長歌とA群長歌では、それぞれ同じ「散り

過ぎにけり」を用いながらも異なる様相が歌われていることになろう。すなわち、固定された視座を通して眼前の桜の様相を捉え、「散り過ぎにけり」を契機として、一貫して桜の現状の維持を要求するA群長歌とは対照的に、B群長歌では、龍田山を越えて難波側から龍田山の桜を視野に収め、「散り過ぎにけり」を契機として、つぼみの状態である桜に対してこれから先の変化を期待することが歌われているのである。

さて、これから先の変化を期待することが歌われるB群長歌の桜は「こちごちの花の盛りに」と、桜の満ち溢れている様相へと続き、十三句目以下の「雖不見左右 君がみ行きは 今にしあるべし」と結ばれる。当該部では、「散り過ぎにけり」を契機として、桜に対するこれからの変化を期待しつつ、すでに、溢れんばかりに咲いている桜の情景が歌われるのである。それが「君がみゆきは 今にしあるべし」と結ばれることにより、「花の盛り」がこれからも続くことを含みこんだ「今」が「君がみゆき」に一番良いことを歌う表現となる。見送られた者が途次において「君」を称讃するのである。

次に反歌では、「暇あらば なづさひ渡り」と歌われる。「暇」は例えば、

我が背子に 恋ふれば苦し 暇あらば 拾ひて行かむ 恋

忘れ貝（6・九六四）

暇あらば 拾ひに行かむ 住吉の 岸に寄るといふ 恋忘

れ貝（7・一一四七）

のように、「暇」があれば実現可能な諸々の行動を多忙ゆえに見送らざるをえないという表現である。当該歌の場合、「向つ峰の 桜の花」を折ることが望ましい行為であるにもかかわらず実現しない不充足感を満たすために「なづさひ渡り」と歌うのである。続く、下句「向つ峰の 桜の花も 折らましものを」は、長歌の「こちごちの 花の盛りに」に呼応する表現になろう。長歌の「散り過ぎにけり」以降、これから先の桜の景が歌われることを受けて、「今」の桜の状態に向こうの桜を加えればさらに良くなることを歌いあらわすのである。反歌にも、長歌で歌われていた「散り過ぎにけり」の射程が届いていることになる。

B群は見送られた者の歌であり、A群とは異なる龍田の桜の描写が表現されていた。それは、龍田山を越えるという越境性による視座の違いと、「散り過ぎにけり」という表現のありように依存していたといつてよからう。B群は「夕暮に うち越え行けば」という確定条件句を伴い、視座が移動する中で「散り過ぎにけり」を契機として、桜が散り過ぎたことに気付いた瞬間が歌われ、つぼみの状態である桜に対して、これから先、変化することを期待する描

写であつた。そうした描写は「君」への称讃に収斂するのである。

四 おわりに

以上、一つの題詞に括られた当該歌群（A、B群）の性質をA、B群の長歌にそれぞれ見られる龍田山の桜の様相を両群共に「散り過ぎにけり」と歌うありようから考えてきた。A、B群では、龍田山越えを介在させることで、桜の様相を捉える視座が異なっていた（A群―大和側、B群―難波側）。その視座の異なりは「散り過ぎにけり」を手がかりに歌表現を追うことによって、一層明確になるのである。

A群（大和側）の場合、白雲が立つ龍田山を概括的に把握し、そこから小桜の嶺の桜の描写に焦点化した結果、「風し止まねば」や「繼ぎてし降れば」という確定条件句を経て、桜の現状に気付くというものであり、視座が固定されていたといえよう。そのうえで「散り過ぎにけり」を契機として、現状の桜の維持を強く要求するという、いわば桜が散ってしまうことへの懸念を歌った歌がA群であつた。

一方、B群（難波側）の場合、龍田山を越え、難波側に移動したことによって桜の現状に気付くのであり、視座が

移動していたといえよう。その視座の移動を表しているのが「夕暮れにうち越え行けば」という確定条件句であった。そして、その確定条件句を経て、「散り過ぎにけり」を契機として難波側から見た桜の様相が歌われる。難波側から見た桜の描写は、つぼみの状態である桜に対してこれから変化することを期待するとともに、A群で抱いた懸念が杞憂に終わり、「君」への称讃にふさわしい桜の景を確認するということであった。

諸卿大夫等が道中の桜を愛でる中で龍田山を境界として大和側と難波側のそれぞれの桜の様相を描写したものが当該作品群であったといえよう。今まで述べた一連の歌の把握は、前掲、坂本論文や瀧口論文の指摘する「虫麻呂の技量」、「虫麻呂の独自性」に繋がるであろう。なお、こうした作品群の次には題詞の異なる「難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首并せて短歌」(9・一七五一〜一七五二)がある。よく指摘されるように、続く「難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首并せて短歌」(9・一七五一〜一七五二)との関連について言及するべきであろうが、ひとまず小稿では、「春三月、諸卿大夫等の、難波に下る時の歌二首并せて短歌」(9・一七四七〜一七四八、A群、一七四九〜一七五〇、B群)の考察に重点を置いた。「難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首并せて短歌」との関

連や表現の差異については稿を改めたいと思う。

注

(1)

十三句目以下の「雖不見左右」には、本文の異同がある。本文

雖不見左右―藍／宮・細／西・陽・温・近・矢・京／無・

附・寛

雖不見左―紀・類・広／陽(イ)・温(イ)

また諸本の訓については以下の通り。(藍紙本、類聚古集、無訓本は除く。)

右訓

紀 ↓ミサレトモ

広 ↓(サカリニ)アサシトモ(キミカ)

宮・細 ↓朱 ミネトモマテ

西以下 ↓青 ミネトマテ

左訓

広 ↓ミネトマテ

宮・細 ↓朱 ミサシトモ

陽・温 ↓ミサレトモ

旧訓「ミネトモマテ」とあったものを文永本では「ミネトマテ」と改訓したことがわかる。さらに、寛元本と文永本の左訓は、「ミサシトモ」と「ミサレトモ」であるが、「シ」と「レ」は誤写が多いため、両方とも「ミサレトモ」の可能性が高い。そして、「ミサレトモ」は「左右」の文字列には訓が付せられていない。「左右」の文字列についていえば、仙覚本系の写本は「左右」を「マテ」と読むか、訓を付さないか

の二様となる。結局、当該歌の原文は「雖不見左右」であるか「雖不見左」であるかを決定することができない。今は、暫定的に西本願寺本の原文をあげるにとどめた。

(2) 宇合と虫麻呂との関係を論じたものでは金井清一氏「高橋虫麻呂と藤原宇合」(『国文学 解釈と教材の研究』第二十三巻五号 一九七八年四月)や木本好信氏「藤原宇合」(『藤原式家官人の考察』高科書店、一九九八年九月)に詳しい。

(3) 「龍田彦」は『延喜式』神名帳に、「龍田比古龍田比女神社二座」とあり、龍田の祭神であることが確認できる。さらに龍田は『日本書紀』天武四年四月十日条(初出)に、風神として祭祀されている。そして、その風神祭祀は『延喜式』「龍田風神祭」に悪風を鎮めることを目的としていたことがわかる。

(4) 拙稿「天平四年西海道節度使を見送る歌」(『萬葉』、萬葉学会、第二一六号、二〇一三年十一月)

(5) これまで、当該歌群の「君」(一七四七番歌「旅行く君」、一七四九番歌「君がみゆき」、一七五一番歌「君が見む」)については、「君」と歌われる実際の対象者に藤原宇合、あるいは聖武天皇が想定されてきた。しかし、歌の解析から当該表現を実体化することは困難であるため今は、歌表現に即して「君」としておく。なお、当該歌群の研究状況については、新谷秀夫氏「虫麻呂の難波に下る時の歌」(『セミナー万葉の歌人と作品』第七巻、二〇〇一年九月)に詳しく論じられている。

付記

小稿は、平成二十三年七月十一日に大東文化大学で開催された上代文学会七月例会での口頭発表をもとにしたものです。

その折、多くの先生方から御意見を賜りました。あつく御礼申し上げます。

また、内田賢徳先生、平舘英子先生をはじめ、「セミナー」ことのは」において御教示下さった先生方にも感謝申し上げます。